

リテンション戦略の 理論と実践例

③ キャンパスインボルブメントの重要性

修士（高等教育アドミニストレーション）

玉置志のぶ Shinobu Tamaki M.S.

学生が、授業以外の時間もキャンパスにとどまり、さまざまなアクティビティ（活動）に参加することは、学びと成長を促し、結果として離学の防止につながる。寮生に比べると大学から遠ざかりがちな通学生をメーンターゲットにした、リテンションに有効なキャンパスインボルブメント（キャンパスアクティビティへの関与）プログラムを構築・展開する方法について考えてみたい。

学びと成長を促すには 良い環境の提供が必要

1970年代、アメリカの心理学者、アレクサンダー・W・アスティンが提唱した I-E-O (Input - Environment - Outcome) モデルがきっかけとなり、アメリカの高等教育機関は、大学が与える環境が学生の成長に大きな影響を与えるという事実注目した。

アスティンは、学生の学びと成長度が環境からどのような影響を受けるかを、心理学的、社会学的両側面から研究し、インプット（学生が大学に入る前に身に付けてきたもの）、環境（大学が学生に与える環境）、アウトカム（学生が卒業までに身に付けた技能や知識などの成果=成長）の3要素がお互いにどのように影響を及ぼすかを、I-E-O モデルとして示した。

アウトカムは、インプットと大学が与える環境との相互関係により決定する。つまり、学生がより良く学び成長することを手助けする環境を提供することが、大学にとって重要である。

アスティンによってこの研究がさらに進められた結果、寮生のほうが通学生より平均 GPA が高い傾向にあること、通学生のほうが、入学後日数がたつにつれ、徐々に大学から遠ざかっていき、授業を欠席しがちな

傾向にあることなどが、データにより明らかにされた。

そして、学生の学びと成長度は、大学への関与の程度（質・量とも）により影響を受けるというインボルブメント理論が発表された。ここでいう質とは、大学が提供する、学生の成長を促進する質の高いカリキュラムやプログラム、量とは、これらへの参加率や滞在時間の長さを指す。

学内での人間関係も 学びと成長度に影響

インボルブメント理論によると、よりよく学び、成長する学生は、キャンパスアクティビティにもより積極的に参加する傾向にある。学生同士、学生と教員の関係が深く良好であるほど、学生の学びと成長度が大きい。そして、学生は、大学の多様な環境の中でさまざまな経験をするほど、深く学び成長する。

つまり、高等教育機関は、学生の学びと成長を促進するための継続的で質の高い多様な環境、例えば、通年開催のプログラムなどを提供し、人間関係を含むさまざまな経験ができる関与（インボルブメント）の機会を与えることが重要である。こうした努力の結果が、学生の離学防止につ

ながることも明らかにされている。

大学が与える環境は、取り組みによって変えることができる。そして、その結果、学生の滞在時間、イベント参加度合を増やすことになれば、離学防止にも貢献できる。今回は、このインボルブメント理論を応用したリテンション戦略を紹介する。

通学生向けイベントで 情報提供や交流支援

米教育省の最新データによると、2003年度、全学生の約85%を通学生が占める。筆者が通ったSUNYカレッジバッファロー校（通称バッファロー・ステート・カレッジ、以下BSC）では、全学生に占める通学生の割合は、2010年秋学期、80.3%であった。

寮生は通学生に比べ、キャンパスで過ごす時間が長く、学内イベントなどの情報を得る機会が圧倒的に多い。したがって、イベントへの参加率も高い。しかし、アスティンの研究結果で明らかにされた通り、通学生は大学から少しずつ足が遠のいていき、学内イベントへの参加率が徐々に下がっていく傾向にある。大学は、8割以上を占める通学生が、大学で過ごす時間を少しでも延ばせるように

工夫をする必要がある。

BSCではキャンパスで学生向けのさまざまなイベントが行われているが、夕方・夜間、週末に開催されるイベントもあり、もっと通学生が参加しやすいイベントを開催してほしいという要望が多い。そこで、数年前から、学生部学生生活課が通学生向けプログラム、Commuter Assistance Program（以下CAP）を提供し、ミーティングやイベントなどを開催している（図表1）。

CAPは通学生同士のネットワークづくりを支援するプログラムで、インボルブメント理論を応用したものである。結果としての離学防止に対する期待も大きい。

学生部学生生活課は、CAPミーティング（コンピューター・コネクション・シリーズ、以下CCS）を1学期に3回開催し、学生同士が顔合わせをし、コミュニティーを作る場を提供する。ミーティングでは、学内駐車場の利用の仕方、通学生対象の割引食券など、通学生にとって有益なキャンパス情報

の提供、また、学生同士が個人情報

を交換する機会の提供などを行う。ミーティングに参加した全学生から名前とメールアドレスを毎回入手し、CAPのコンピューター・アシスタント（CA）としてメンバー登録する。通学生にCAの一員と自覚させ、大学への帰属意識を持たせるためである。登録後、CCSやイベントへの参加回数をカウントし、学期終了後に参加状況を集計する。年間6回のCCSすべてに参加した学生には修了証を授与。そして、参加回数の多い学生を中心に、通学生自治会（Commuter Student Council）に勧誘する。

通学生自治会のメンバーには、自治会主催の通学生向けのイベントを企画・実行する、学生生活課が提供するイベントのボランティアをする、などの任務が課される。メンバーの一員となり、責務を果たすことにより、組織運営、スケジュールの管理等を学んだり、チームワーク、責任感を養ったりして、成長する。

イベントや自治会への参加はすべて学生本人の意思に任されているが、同級生からの誘いが参加を促すきっかけになり、参加率が上昇する。結果的に、友人との交流時間、キャンパスにいる時間が長くなり、友人を増やす機会も増える、といった効果が望める。これがインボルブメント理論を応用したCAP

のねらいである。

2011年春学期のCA登録者は1012人（通学生全体の10.8%）であった。学期終了まで、1割強の通学生に大学に通う動機を与え、インボルブメントに一部貢献したといえる。

通学生自治会と協働し プログラムを推進

CAPの担当アドミニストレーターは、CCSで提供するキャンパス情報のプレゼンテーション準備、通学生向けニュースレターの作成、通学生向けイベントの企画・実行、イベント実行のための人材確保、メールやSNSを利用したイベントスケジュールの提供、イベント参加者数の集計、通学生自治会メンバーの顧問役などを担う。

アドミニストレーター1人ですべての任務を果たすことは時間的に難しいため、通学生自治会とのコミュニケーションと協働がCAP成功の鍵となる。メンバーと月に1度のミーティングを行い、自治会主催のイベント準備の進行状況を確認すると同時に、学生生活課主催イベントのボランティアをメンバーから確保する。また、メンバーを通して、通学生のボランティアを募集することもある。

筆者の経験から、できるだけ多くの参加者を確保する手段として、①口コミ、②SNS（フェイスブック）、③eメール、④チラシやポスターの順に効果がある。つまり、情報を流す際、ITだけに頼らず、直接学生に会って勧誘するという地道な手段が参加者増加につながると言える。そのためにはネットワークの構築が重要で、CAPはこれを学生同士の間に構築するという大学側からの仕掛けである。

図表1 2010年度CAPの内容（一部）

	日程	内容	参加人数
2010年秋学期	8/31~10/26の火曜	朝食無料サービス	平均約40
	9/8	駐車場BBQパーティー1	120
	9/9	ウェルカムバック・ブランチ	65
	9/15	駐車場BBQパーティー2	240
	9/28	CCS1	70
	10/12	CCS2	98
	11/9	CCS3	84
	11/18	メイキングドリンク大会	235
2011年春学期	1/27	ウェルカムバック・ブランチ	39
	2/1	CAP朝食会	35
	2/10	CCS1	100
	2/22	CAP朝食会	62
	2/17~4/25の火曜	朝食無料サービス	平均約50
	3/3	CCS2	113
	3/17	CCS3	60
4/30	通学生対寮生ソフトボール大会	180	

※内容は筆者による翻訳
*取材協力:リチャード・A・ハリス氏(BSC 学生部学生生活課アシスタントディレクター)

*参考文献: Astin, A. W. (1999). Student involvement: A developmental theory for higher education. Journal of College Student Development, 40(5), 518-529.